



## 戸坂潤の日本ファシズム論について(上) : 日本ファシズム研究覚え書き

著者	後藤 靖
雑誌名	関西大学経済論集
巻	32
号	4
ページ	617-633
発行年	1982-11-20
その他のタイトル	A Note on the Jun Tosaka Theory on the Japan's Fascism (I)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/14484">http://hdl.handle.net/10112/14484</a>

## 論 文

## 戸坂潤の日本ファシズム論について(上)

—日本ファシズム研究覚え書き—

後 藤 靖

## はしがき

日本ファシズムについての研究が、近年ようやく本格的な研究の段階に入ってきたように思われる。その研究の動向についての理論的な整理は、すでに山口定、木坂順一郎、安部博純氏らによって行われている<sup>1)</sup>。これらの人々によって新しく提起された研究上の課題として共通しているのは、日本ファシズムを思想や運動といった諸側面の個別的な分析からさらに一步進めて全機構的、とりわけ国家体制としての特質を明らかにすべきだということである。このような課題の設定は、日本ファシズム研究にとってきわめて大事なことであり、日本ファシズム研究の本筋をさし示したものであるといえる。そういう意味で、この研究課題の設定についてはわたしも基本的に賛成である。

このような課題設定は、ファシズムにかんする古典的規定となっているディミトロフやトリアッティなどの見解(=コミンテル第七回大会、1935年)を典拠にし、それをより理論的に深化させようとするねらいをもっている。従前の日本

1) 山口定著『現代ファシズム論の諸潮流』(1976年、有斐閣)、安部博純著『日本ファシズム研究序説』(1975年、未来社)、現代史研究会編『日本ファシズム』(1981年、大月書店)所収の安部論文「日本ファシズム体制論」、木坂順一郎「日本ファシズム国家論」(『体系・日本現代史』(3)所収、1979年、日本評論社)、河原宏ほか『日本のファシズム』(1979年、有斐閣)など。

ファシズム研究は、「権力をにぎったファシズムは、金融資本のもっとも反動的、もっとも排外主義的、もっとも帝国主義的な分子の公然たるテロ独裁である」<sup>2)</sup>というディミトロフの「階級の本質論」のみを取り出し、その側面からのアプローチであった。そしてその場合、同じディミトロフの「ファシズムの権力掌握は、一つのブルジョア政府と他のブルジョア政府との普通の交代ではなく、ブルジョアジーの階級的支配の一国家形態であるブルジョア民主主義と、いま一つの国家形態である公然たるテロ独裁との交替である」<sup>3)</sup>という規定は、ほとんどかえりみられなかった。ディミトロフのこのファシズムについての本質規定は、ファシズムを単なる政府形態レベル——議院内閣制が否かという類の程度の問題としてではなく、国家の組織体制そのもの、およびその正統性原理の転換として意味づけている。その場合に、ディミトロフはファシズムはブルジョア国家の国家形態の転換といているのであり、ファシズムはブルジョア国家類型の中での例外的国家形態としてとらえている。

山口、木坂、安部氏らが設定した問題は、このディミトロフらの規定した「ファシズム＝ブルジョア国家形態」論を深め、それを日本ファシズム分析の理論的基礎にすえるべきだということである。このことから、とくに日本ファシズムの研究者たる木坂、安部両氏の場合には、日本ファシズムはイタリヤやドイツのファシズムとはその具体的な形態は異なるにしても、それがファシズムであるかぎりには、当該段階の日本は「ブルジョアジーの階級的支配の国家形態」＝ブルジョア国家類型でなければならなくなる。事実、両氏とも、表現上のニュアンスのちがいはあるにしても、大日本帝国憲法発布以後の天皇制国家は「資本主義を支配的ウクラードとする資本主義国家類型」であり、「憲法発布の1889年2月から満州事変勃発の1931年9月までを立憲君主制、31年9月から大政翼賛会が成立した40年10月までを立憲君主制のなしくずしの崩壊にともなう天皇制ファシズムへの再編過程＝『上からのファシズム』化、40年10月か

2), 3) ディミトロフ著『反ファシズム統一戦線』(坂井, 村田訳, 1955年, 国民文庫),  
トリアツティ著『コミンテルン史』(石堂, 藤沢訳, 1961年, 青木文庫)

ら敗戦の45年8月までを天皇制ファシズム<sup>4)</sup>と規定されている。だが、両氏の、天皇制国家が帝国憲法発布以後に資本主義国家類型としての立憲君主制的ブルジョア国家形態の内実をそなえるにいたったという主張は、必ずしも説得的ではない。しかし、この主張にたいしての批判は本稿の課題ではないので、この点についての私の批判的見解は別の機会に譲りたい。

近年の日本ファシズム研究の新しい課題設定をめぐる有力な見解にふれたのは、実は本稿の課題である戸坂潤が1930年代にいち早く論及していたということをお願いしたためである。戸坂が精力的に追究した日本ファシズム論は、今日の日本ファシズム研究のなかでは、管見のかぎりではほとんど回顧されず、いわば忘れられた存在になっているかのように思われる。もちろんのこと、戸坂の理論展開のなかには、当時のコミンテルンの社会ファシズム論や天皇制国家規定についての誤った考え方、さらにはファシズムにかんする国家理論の未熟さといった理論上の弱さにわざわざされている弱点は多い。けれども、戸坂の思想、運動および国家諸機関の変容と政策といった多面的な分析は、日本ファシズム研究に取りかかろうとしている私にとってはその印象は強烈であり、今日の研究のある種のものよりはるかにすぐれているという感さえ抱かせる。日本ファシズム研究にふみ入ろうとしている私が、あえて本稿を草しようとするのは、日本のファシズム化の過程の中で生き、それと真正面から対決し、そしてついにそれによって自らの生命を奪われた戸坂のするどい分析にひかれたからである。

---

4) 木坂、前掲論文、22頁。安部、前掲書、156頁参照。

〔付記〕戸坂潤は、故市原教授と私にとっては思い出かい先人である。日本帝国主義の敗北を目前にしながら獄死したという戸坂の生涯を知っていた市原氏や私たちには、戸坂のことを知りたいという強烈な願いがあつた。1946年から1948年にかけて『戸坂潤選集』（全8巻）が店頭に並べられたとき、私たちは何度も何度もそれを手に取っては「欲しいなあ」といいながら、ついに買う金をひねり出すことはできなかった。ものすごいインフレと食糧難のなかで、その日その日を食いつなぐアルバイトに追われつづけていた貧乏学生であった私達には、その本はまさに高嶺の花であつた。その思い出が、本稿を草する私の動機ともなっている。

## 1. コミンテルンのファシズム論

戸坂の日本ファシズム論を論じるためには、彼がその問題を精力的に追究していた1932～37年ごろのファシズムについての内外の論調を追跡しておかねばならない。なぜなら、戸坂の分析はその当時のコミンテルンのファシズム論と日本での研究状況に必然的に制約されざるをえなかったものであり、その制約の中にあっても彼がどのように独自の、傑出した解明を行ったかという位置づけを知るためにも不可欠のことだからである。しかし、この仕事は、それ自体がおそろしい難事業であり、いまの私の能力をはるかに越えた課題である。そこで、ここではきわめて簡単な整理にとどめておきたいと思う。

### (1) コミンテルのファシズム論

コミンテルでのファシズム論についてのとらえ方の変化については、山口定氏はじめ多くの人々の詳細な検討がある<sup>1)</sup>。そこで、ここではそれらの研究に依拠しながら、ごく簡単にみるに止めよう。

それらの諸研究で明確にされた一つの、しかも根本的な論点は、第六回までのコミンテルンのファシズムおよび社会民主主義者にたいするとらえ方が第七回大会(1935年)で大きな変化をとげたということである。この点について、トリアッティは1959年に次のように書いている。

私は、社会民主主義を社会ファシズムと規定したことが、もっとも重大なあやまりだったと思う。だから、その規定から出てきた政策もまちがっていた。社会民主党指導者たちが、ファシストと同じように、武器をもって大衆の革命運動を弾圧し押しつぶすようになったことは事実である。そしてまた、階級協調を宣伝する改良主義者のイデオロギーと、ファシストのもっていたいくつかのイデオロギー的命題とに、接触点があったことも事実である。しかし、この二つの運動の社会的性質はまったく異っていた。ファシストの背後には、資本のもっとも反動的なグループがいた。これに反して改良主義的指導者は他の性質の、まだ一種の民主主義的伝統とブルジョア平和主義に結びついたグ

1) 山口定著、前掲書、岩村登志夫著『日本人民戦線史序説』(1971年)参照。

ループと同盟していた。この運動の大衆的基盤も異なっていた。改良主義の指導する組織内には、多くの国で、なお労働者・勤労者の多数がいた。そして、これらの組織を攻撃し、破壊することにファシストの暴力が向けられたのである。（中略）。社会ファシズムという定義は、この民主主義破壊の目的が、目見主義指導者にも本来の社会民主主義にも共通だと認めることを意味していた。しかし、それは事実と反していた。というのは、社会民主党の一部が、しかもかなり重要な部分が、断固として民主制擁護のために立ち上ろうとしていたし、また事実立ち上ったからである。云々<sup>2)</sup>

トリアッティから長く引用したのは、それが日本問題を考えるうえでも重要だと考えたからである。いずれにせよ、このトリアッティの行文は、コミンテルンの第六回大会までの決議と第七回大会でのそれとでは、決定的な内容上の変化があったことを物語っているといつてよい。そして、そこには二つの点での指摘がなされている。

その第一は、そしてこれがトリアッティの直接的な指摘部分でもあるが、社会民主主義にたいする評価＝社会ファシズム論にたいする自己批判であり、同時にまたコミンテルンの第六回までの規定の否定ということである。「社会民主主義＝社会ファシズム」論は、後にみるように、コミンテルン日本支部としての日本共産党のいわゆる「三二テーゼ」にもつらぬいていた基本規定であり、戸坂の場合にもその考え方は抜きがたいものとして随所に示されている。コミンテルン第七回大会での「社会民主主義＝社会ファシズム」論の自己否定は、主要には反ファシズム統一戦線をどのように組織化していくべきかという戦術にかかわるものであった。だが、第二に、この「社会民主主義＝社会ファシズム」論の葬送は、さきに引いたディミトロフのファシズム規定ともかかわっていたのである。トリアッティの表現をかりれば、ファシズムは、「何か一つの政府をべつの政府におきかえることではなく、ブルジョア民主主義という一つの国家形態をテロリスト独裁に変えようとするもの」<sup>3)</sup>であり、たんなる政府形態の変化ではなく国家形態の変化そのものとして把握しなければならない、

2), 3) トリアッティ著『コミンテルン史論』、石堂清倫・藤沢道朗訳、153～4頁、158頁（1961年、青木文庫）。

という基本規定とかかわっていたのである。

ディミトロフもトリアッティも、ともに国家形態の問題としてファシズムをとらえている。だが、その国家形態論は「ブルジョア民主主義」から「テロリスト独裁」への変化という指摘にとどまっており、国家形態そのものについての理論展開は行ってはいない。いま、わが国でもファシズム体制をどう国家論的に構成すべきかということが課題に上っているのは、そうした事情にもとずいている。とはいっても、ディミトロフにしてもパーム・ダット<sup>4)</sup>にしてもコミンテルンの執行部にあった人々が、ファシズムの国家形態論に全く関説していないということとはできない。それは、コミンテルン第六回大会の「国際情勢と共産主義インタナショナルの任務について」(1928年8月28日)というテーゼや「共産主義・インタナショナル綱領」(1928年9月1日)のなかでも、山口定氏の指摘されるような経済主義的偏向をもってはいるにしても<sup>5)</sup>、ディミトロフやパーム・ダットが発展させたファシズム論の基本骨子はほぼ出されている。それが、おそらくは戸坂にとっても一つの理論的なよりどころとなっていたと思われるので、少し長文ではあるが、「綱領」の叙述部分をあえて引用しておこう。

帝国主義時代、階級闘争の激化、内乱の要素の増大——ことに世界帝国主義大戦以後におけるその増大——は、議会主義の破産をもたらした。その結果、「新しい」統治方法と形態が生まれてきた(たとえば、<sup>イナナー・キヤビネット</sup>閣内内閣制度、寡頭支配的な黒幕グループの成立、「人民代議制」の役割の低下と偽造、「民主主義的自由」の制限と廃止、その他)。ブルジョア的・帝国主義的反動の攻勢のこの過程は、特別な歴史的諸条件のもとではファシズムの形態をとる。そういう条件とは次のものである——資本主義的諸関係の不安定性、階級から脱落した多数の社会的分子の存在、都市小ブルジョアジーとインテリゲンチヤの広範な層の貧困化、農村小ブルジョアジーの不満、最後にプロレタリアートの大衆行動のたえまない脅威。自己の権力をいっそう安定させて、それを強固な、恒久的

4) R. P. ダット著『ファシズムと社会主義革命』、岡田良夫訳(1974年、ミネルヴァ書房)参照。

5) 山口定著、前掲書、第二章参照。

なものとするために、ブルジョアジーは、議会制度から、諸政党の相互関係や組み合わせにかかわらないファシズム的方法に移ることを、ますます余儀なくされている。この方法は、イデオロギー上で「全国民的思想」や「職能代表制」（本質上、支配階級のさまざまなグループの代表制）によってカムフラージュされた直接的独裁の方法であり、独特な社会的デマゴギー（反ユダヤ主義、高利貸資本にたいする部分的な攻撃、議会「おしゃべり会」攻撃の扇動）にたよって小ブルジョアジー、インテリゲンチヤその他の大衆の不满を利用し、結束した有給のファシスト戦闘隊、党機関、党官僚の職階組織をつくりだすという仕方では彼らを買収する方法である。そのうえ、ファシズムは、最も遅れた労働者層を獲得し、彼らの不满、社会民主主義の受動性等々を利用することによって、労働者のなかへももぐりこもうとつとめる。ファシズムの主要な任務は、労働者の革命的前衛、すなわち共産主義的なプロレタリア層とその幹部要員を粉砕することである。社会的デマゴギーと買収と積極的な白色テロルとを結びつけていること、および対外政策の部面での極端な帝国主義的侵略性が、ファシズムの特徴である。ファシズムは、ブルジョアジーにとってとくに危機的な時期には反資本主義的な言辭を用いるが、いったん国家権力の中枢に足場をかためてしまうと、その反資本主義的な口上を捨てさせて、大資本のテロル独裁というその正体をますますあからさまにする。

ブルジョアジーは、政治状況の変化に適応して、ファシズムの方法を用いたり、社会民主主義との連合の方法を用いたりする。そのうえ、資本主義にとって最も危機的な時機には、社会民主主義そのものが、ファシズムの役割を演じることも、稀ではない。社会民主主義は、その発展過程でファシズム的傾向をあらわしてくるが、そのことは、別の政治状況のもとで、社会民主主義が、反政府党の資格で、ブルジョア政府にたいして反抗の氣勢を示すことを妨げない。ファシズムの方法と、社会民主主義との連合の方法とは、「正常な」資本主義にとっては異常な方法であり、資本主義の全般的危機の徴候であって、ブルジョアジーによって革命の前進を抑えるために利用される<sup>6)</sup>。

コミンテルン第六回大会の「綱領」のこの部分が、その後のいくつかの論争を経て、ひとまずディミトロフの規定——①「権力をにぎったファシズムは、金融資本のもっとも反動的、もっとも排外主義的、もっとも帝国主義的な分子の公然たるテロ独裁」、「政治的ギャング行為の統治体制」、「革命的分子にたいする挑発と拷問の体制」、「諸国にたいする野放図な侵略」、「議会の権能の偽物

6) 村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第四巻（1981年、大月書店）

化と制限」,「デマゴギー」,「民族的特殊性の強弁」等々といったファシズム体制の特徴づけ, ②「ファシスト独裁は, 凶器ではあるが, 不安定な権力である」,「階級矛盾の激化」,「大ブルジョアジーの独裁であるファシズムは, 不可避免的にその大衆的な社会的基盤と衝突せざるをえない」<sup>7)</sup>——に発展させられていく。

「綱領」からディミトロフ規定にいたるファシズム論は, すでにいったように, けっして完成された国家形態論にはなっていない。けれども, そこにはマルクスやエンゲルスの国家論が深められていることも見落してはならない。要点をかいつまんでいえば, ブルジョア国家形態についてそれまではもっぱら立憲君主制や共和制といった統治形態のレベルで論議されていたものが, いまや政治レジーム(ブルジョア民主主義か暴力的な独裁か)論にまでふみこんでの新しい国家形態論が提起されはじめたということである。このことは, 戸坂の日本ファシズム論を追跡していくうえでの国家論の問題としてはかなり重要な論点でもある。

## (2) 「三二テーゼ」の規定と当時の日本ファシズム論

戸坂理論の位置づけを明らかにするためのいま一つの前提となるのは, 当時における主要な論調の検討であろう。その場合, いうまでもなくコミンテルンの日本の権力規定とそれにもとづく日本共産党のテーゼの分析が必要となる。そこで, ここで簡単にこの問題のみておくことにしよう。

コミンテルンでは, 日本問題についてのどの決議をみても, 日本がファシズム体制であるという規定はしていない。ただ一つの例外的なものとしては, 1931年の「日本共産党政治テーゼ草案」がある。それは, 次のように述べている。

- ・「1868年の明治革命」は, 「非常に不徹底なもの」であったが, 「疑いもなく資本主義発展の途を切り開いたブルジョア民主主義革命」であり, 「天皇制の明治維新政府は新興

7) ディミトロフ著『反ファシズム統一戦線』, 坂井・村田訳, 14~19頁および35~6頁参照(1955年, 国民文庫)。

ブルジョアジーと地主階級の利益を保護した」。

- 「日本は今や高度に発達した帝国主義国」であり、「日本の国家権力は金融資本が覇権を握れるブルジョア地主の手中にある」。「天皇制は現在では労働者・勤労被搾取農民大衆の台頭に対する金融資本を先頭とする支配階級のファシズム的弾圧、搾取の有力な道具となっている」。
- 「金融資本覇権の確立、国家機関のファシズム化の条件の下における経済闘争の拡大は常に大きな政治的重要性を有する」。
- 現下の日本の一切の「合法的無産政党」は、「プロレタリアートのヘゲモニーの代りに小ブルジョアのヘゲモニーを確保せんとするものであり、ファシズム独裁によって帝国主義支配を永久化せんとするものである」。
- 社会民衆党、全国大衆党、新労農党、「労農」派は反共主義、帝国主義的排外主義、植民地の独立否定、農業革命否定という点で共通した社会民主主義者であり、「国際的には第二インターナショナルと行動を共にし、国内的には天皇主義の旗の下に行動し、革命的労働運動弾圧の直接行動者として、日本の社会民主主義者は明白に社会ファシストである」<sup>8)</sup>。

みられるように、「草案」は、日本の当該段階を「高度に発達した帝国主義国」であり、「金融資本の覇権が確立」し、「国家機関のファシズム化」が進行しつつあり、しかも合法無産政党は「ファシズム独裁によって帝国主義支配を永久化」するために「革命的労働運動弾圧の直接的行動者」として現われていることを指摘した。この「草案」の基本的な特徴は、天皇制国家をブルジョア国家形態のもとでの金融資本の覇権として規定し、それがファシズム化しつつあるという断定と、当時のコミンテルンの支配的な考え方であった「社会民主主義者＝社会ファシズム」論の日本への適用という点にある。

ところが、「草案」は、いわゆる「三二テーゼ」によって完全に葬り去られた。いま「三二テーゼ」の重要な個所を示せば、次のようである。

- 「日本において1868年以後成立した絶対君主制は、その政策に幾多の変化を見せたにも拘らず、無制限、絶対の権をその掌中に維持し、勤労階級に対する抑圧及び専制支配の

8), 9) 石堂清倫・山辺健太郎編『コミンテルン日本にかんするテーゼ集』（1961年、青木文庫）。

ための官僚的機構を間断なく造り上げた」。

- 「日本の天皇制は、一方では主として地主として寄生的封建的地主階級に立脚し、他方では又急速に富みつつある強欲なブルジョアジーにも立脚し、これらの階級の棟領と極めて緊密な永続的ブロックを結び、仲々うまく柔軟性をもって両階級の利益を代表し、それと同時に、日本の天皇制は、その独自の、相対的に大なる役割と、似而非立憲的形態で軽く粉飾されているに過ぎない、その絶対的性質を保持している」。
- 「日本共産党の陣列内で以前主張されていたような、天皇制の役割を過小評価すること、議会および政党内閣は独自の、天皇制から独立したブルジョア国家形態であるかの如く、これらのものを天皇制と対置することは、根本的に誤謬である」。
- 「日本に存在する絶対主義的支配は、ブルジョアジー及び地主の勤労者に対する独裁の形態としてその抑圧的な点において他の資本主義諸国におけるファシズムに決して劣るものではない。決定的な根本事実、ある程度の歴史的特異性によって抹殺し去られてはならない。党は支配階級及び社会民主主義の欺瞞的駈け引きを暴露せねばならぬ。その駈け引きとは、迫り来るファシズムの幽霊を使って、現在の天皇制支配を美化し、増大しゆく反動の重圧を瞞着し去り、天皇制に対する消滅しつつある幻想を維持し強化し、大衆をば現在の諸条件の下における主要敵——ブルジョア—地主的天皇制——に対する闘争から外らすということに存する」。
- 「ブルジョア—地主地独裁の政策は、警察と同盟した社会民主主義者の積極的支持の下に遂行されている」。「社会ファシスト、特にその左翼（労農大衆党、警察の直接のスパイなる解党派）は、依然としてストライキ闘争及び農民争議の指導をその手中に維持しているが、それは勿論ただこれを裏切らんがためにである」。

「三二テーゼ」は、天皇制国家を天皇制、寄生地主階級および独占ブルジョアジーの緊密で永続的なブロック権力であり、しかもそのなかで天皇制が相対的に独自の無制限絶対の権力をもつところの絶対主義国家と規定した。この規定は、「草案」での天皇制国家＝ブルジョア国家論の真向うからの否定である。ファシズムがブルジョア国家の特殊な一形態であるというコミンテルンの規定からすれば、絶対主義としての天皇制国家がファシズム国家ではありえないという規定がでてくるのは、機械論的には必然であったといつてよい。とはいっても、「三二テーゼ」は日本におけるファシズム運動—ファシストや社会ファ

シズムの存在を否定していたのではない。それどころか、「社会民主主義—社会ファシズム」というコミンテルンの規定をそのままとりいれ、そしてそれが絶対主義天皇制の新しい社会的基礎を構成しつつあるとさえ断定している。しかし、ここで確認しておかなければならないことは、「草案」が「国家機関のファシズム化」を指摘していたのにたいして、「三二テーゼ」は、その規定は天皇制を美化し闘争の目標を誤らせるものとして、「国家機関のファシズム化」というとらえ方を真向うから否定したということである。

「三二テーゼ」は天皇制国家をファシズムと規定することをきびしく批判したが、日本がファシズム化しつつあるという見解が論壇において全く存在しなかったわけではない。とくに「労農」派の立場にたつ論者は、例えば猪俣津南雄の「1930年頃からの日本資本主義は、政治的には、明白はファシズムの段階に入りこんできているということが出来る」（中央公論、1935年7月号）という見解にみられるように、日本がファシズムの段階に突入したという規定を行っている。そればかりか、「三二テーゼ」や「講座」派に依拠する論者の中にも、例えば小岩井浄のように、論文「日本ファシズムの特質」（『社会評論』1935年6月号）で、1932年5月の斎藤内閣の出現、34年7月の岡田内閣の成立、新官僚の台頭、国策審議会の設置、統制経済の進展、警察政治の重圧などは「ファシズムのための準備工作の進展」であり、その動向は、「半封建的なものと苟合した日本資本主義の特質に規定されて、半封建的色彩をもった日本型ファシズムという特徴をもつものとして進行しつつある、という考え方も出されていた<sup>10)</sup>。

## 2. 戸坂のファシズム概念

戸坂の日本ファシズム論を論じるために必要な、当時のファシズムにかんする諸規定や日本の国家権力のとらえ方についての一般的状況の叙述が長くなっ

10) 小山弘健・浅田光輝著『天皇制国家論争』第一部第四章参照（1971年、三一書房）。

てしまった。けれども、その論調の検討は戸坂理論の独自性を知るためには不可欠のものと私は考えたからである。

さて本題に入ることにしよう。

#### (1) 戸坂のファシズム概念

まず、はじめに、戸坂のファシズムについての概念規定について簡単に検討しておこう。

(A) 戸坂がファシズムについての彼自身の概念規定を最初に行っているのは、1932年の論文「ファシズムのイデオロギー性」<sup>1)</sup>においてである。そこでは、こう書かれている。

- ファシズムは、「末期資本主義の行き詰り、解くべからざる矛盾を切り抜けるための資本主義の最後の手段である処の、従ってブルジョアジーにとっては最後の絶対的な切札」である。
- 「ファシズムは、たとい小ブルジョアが實際上それを有ち、又一見或る程度まで彼らの利害を代表しているにしても、終局に於ては又は第一義的には、決して小ブルジョア自身の利害の意識などではなくて、正にブルジョアジーそのものの大利害をしか代表していない。このイデオロギーを主として所有する階級乃至身分と、このイデオロギーが主としてその利害を大々的に代表する階級とは必ずしも一つではない、ということが現在のファシズム・イデオロギーの最も大切な特色の一つをなしている」。
- 「ファシズム・イデオロギーに於ける、観念が比較的独立に観念としてのみ活動している処の、その意味に於て自由な、この特有なイデオロギー性—観念性—は、ファシズムが何よりも先に一つの政治形態として第一義的に特色づけられるのを常とするという一つの事実を説明する。例えばマルクス主義は、何よりも先に一つの経済理論であって、その必然的な結果として初めて一定の政治形態を必要とするようになるのだが、ファシズムは一般的に云えば之に反して、まず第一に一つの政的形態の主張—その国家乃至民族理論及び独裁形態説等々—から始まり、その後初めて（比較的偶然に）必要な経済理論を之につけ加える。生産の『国家的統制』と雖も、あらかじめこうした政治形態を想定した上で初めて問題となる」。
- 「ファシズム・イデオロギーにとっては、事物は凡そ精神主義・宗教主義・神秘主義と

1) 『戸坂潤全集』第2巻。

いったイデオロギー的・観念的にしか取り扱われなくなる。資本主義という客観的な物質的な社会の歴史的矛盾は、資本家諸個人という主観的な精神的な個人の倫理的欠陥としてしか把握されない。悪むべきは資本家だ（決して資本ではない）というのである。こうして資本と資本制度とは、資本家の手から国家（ファシズムによればそれが超階級的な絶対者である）の手に『奉還』されねばならない（国家資本主義）。実際 そうしなければ資本主義はもはや一刻も命を永らえることは出来ないのである。ところがファシズムの主張の如何に関係なく、資本主義が生き永らえるということは取りも直さず資本家階級・ブルジョアジーが生き永らえるということだ。でファシズムはその特有なイデオロギー性・観念性のおかげで、甚だ尤もらしく見える処の—資本家横暴—而も最も強力なブルジョア・イデオロギーとして奉仕出来るという仕組をもつことができるわけなのである」。

この引用文は、論文のテーマそのものがイデオロギーの特質の分析であるため、ファシズムの「政治形態」を必ずしも特徴づけてはいない。しかしながら、ブルジョア民主主義の国家形態とファシズムのそれとのちがいが、マルクス主義とファシズム理論における国家と経済との関連のとらえ方の根本的相異の規定の仕方のなかに、われわれは戸坂のファシズム論の卓越性をみることが出来る。例えば、国家と経済との関連の把握という点で、パーム・ダットは、「ファシズムは原始時代とか小規模生産への復帰を宣伝」し、「機械にたいするイデオロギー的 反逆と技術の発展にたいする敬意を強めている」<sup>2)</sup>と書いているだけである。たしかに、機械・技術の急速な発達とそれに伴う資本の有機的構成の高度化は、資本にとっての利潤率の低下傾向をもたらし、そのためにブルジョアジーが「機械にたいする敵意、恐怖、憎悪を強め」<sup>3)</sup>することは否定できない。けれども、このような「敵意」は、ファシズムだけに特有のものではないはずである。実際に、パーム・ダット自身が引用しているように、1930年の「タイムス」誌や1932年のフーヴァ調査委員会もそうした記事を発表している<sup>4)</sup>。問題は、この反技術主義がなぜある国ではファシズムと結びつき、他の国ではファシズムと結びつかなかったかということである。パーム・ダット

2), 3), 4) パーム・ダット, 前掲書, 70~76頁参照。

の論理ではそれがほとんど説明できない。これに対して、戸坂は、「ファッション的段階に立ったブルジョア観念哲学の技術反対主義」は、「技術の文明史上の価値」を認識せず、むしろそれを「文化危機や文明の没落」の原因とみなし、「唯物論の打倒」と「国粹主義」の昂揚のための手段として使われていると特徴づけた（『技術の意義』1936年）。すなわち、戸坂は、ファシズムの反技術主義をパーム・ダットのように「資本の敵意」というような一般的な潮流として流しこむのではなく、いわば「技術没価値論」に立つ特有な神秘主義・精神主義論として内容づけたのである。この戸坂のとらえ方は、マルクス主義とファシストの国家と経済との関連のとらえ方のちがい、およびさきに引用しておいた「ファシズムの特有なイデオロギー性は、ファシズムが何よりも先に一つの政治形態として第一義的に特徴づけられることを常とする、云々」という諸規定とも内容的につながっており、戸坂のファシズム論の卓越した理論を構成しているといえる。近年のわが国におけるすぐれたファシズム研究者の間でも、いま述べてきた戸坂の論理展開は必ずしもふまえられてはいないように思われる。

ところで、上記の引用文のかぎりでは、ひとまず戸坂のファシズム論を整理してみると、次のようにいえることができるであろう。

(1) ファシズムは、末期資本主義の激化した諸矛盾を切りぬけようとする金融資本の最後の絶対的な切札としての独裁的政治形態であり、金融資本の大利害を代表するものである。

(2) その「理論」は、いちぢるしく国粹主義的・民族主義的・侵略主義的であり、しかも精神主義・神秘主義・反技術＝反唯物論主義と特有の倫理観でおおわれている。

(3) その独特の観念論・倫理観が、既存の政治的・経済的・社会的権力の国家への「奉還」と「超階級的な絶対者」としての新国家の建設という擬似革命論として機能し、階級ないし身分をこえた横断的なイデオロギー地帯を形成する。

(4) その独特の倫理観が支配者諸個人への攻撃・テロ行為を生みはするが、「政治形態の主張」の先行第一義性という特有の理論から資本主義・金融資本を永続させる。

戸坂のファシズム論は、この32年の論文以後の後の全著作のなかで随所に展開され、深められていく。例えば、1935年の論文「日本主義の再検討」<sup>5)</sup>での次の行文がその一例である。

独占資本主義が帝国主義化した場合、この帝国主義の矛盾を対内的には強権によって蔽い、かつ対外的には強力的に解決出来るように見せかけるために、小市民層に該当する広範な中間層が或る国内並びに国際的な政治事情によって社会意識の動揺を受けたのを利用する政治機構が、取りも直さずファシズムであって、無産者の独裁に対してもブルジョアジーの露骨な支配に対しても情緒的に信念を失った中間層が情緒的に自分自身の利害だと幻想する処のものを利用して、終局に於て大金融資本主義の延長という成果を収めるのに成功しそうに見える比較的有利な手段がこれなのである。

ここで戸坂が前述の引用文につけ加えた重要な論点は、①ファシズムをたんに国内的契機からだけでなく、「国際的な政治事情」にもその背景をもっていること、②ファシズムは対内的強権ばかりでなく、対外的強力＝侵略主義によってその危機をのりきろうとする政治機構であるということである。戸坂が政治機構というとき、それは議会、政府、官僚、軍部、自治体だけではなく、各種の審議会や政党等々も含む広義のものである。この点は、彼の日本ファシズム論を分析する個所で明らかになるであろう。

いま一つ挙げておかねばならない論説は、「大衆の再考察」(1936年)である<sup>6)</sup>。ここで彼は、社会科学的概念としては、大衆は「無産者であり被支配者」であり、そしてほんらいは「自分自身による組織の力」をもつだけの「積極性・自発性」も有しているが、現実には「未組織な大衆が大多数」であり、それらは「やがて組織さるべき方針におかれ」ており、この何らかの「組織があって初

5) 『現代唯物論講話』(戸坂潤全集、第3巻所収) 293～5頁参照。

6) 『戸坂潤全集』第2巻、322～3頁。

めて大衆は大衆となる」といい、ファシズムと大衆との組織的関連について次のように書いている。ファシズムは、「大衆自身による組織性を認めず」、「無組織性」としての「愚衆」化してしまう。そのうえで「ファシスト的最高貴族（それが所謂ファシズムの政治哲学の第一原理をなす）」が大衆に「秩序と組織とを与える」。「大衆に秩序と組織を与えるこの指導者は、だから一見大衆のためのものであり大衆自身のものであるかのように取られ得る可能性を有っている。実際この可能性があってこそ初めて、大衆は指導者の下に組織され得たし又得るのである……。大衆に地盤をもつかのように、或いは大衆の組織化であるかのように見えることが、ファシズムを単なる強力絶対政治から区別する一つの特徴なのである」。ここにファシズムの「大衆性」が横たわる。ファシスト的指導者＝少数者が「大衆性を持ち得るのは大衆のこの機構—組織があって初めて大衆は大衆となる—によるのである」。

この大衆とファシズムとの関係についての戸坂の論理は、最近の「擬似革命」論によってファシズムを解明しようとする見解(山口, 安部, 木坂氏ら)にもずるものといってよからう。戸坂は、この論理を駆使しながら、後述するよに、日本ファシズムの社会的基礎を分析している。だが、このするどきにもかかわらず、戸坂の大衆論には重大な欠陥がある。この点については、日本の分析をみる個所で指摘することにしよう。

(B) 戸坂のファシズム論は、おそらく前節に引いた「共産主義インタナショナル綱領」(1928年9月1日)を典拠としていたと思われる。もっとも、その後に出版されたファシズムの代表的諸文献に目を通していたことは、『ファシズムの諸問題』(庄司, 松原訳編, 1936年)の書評の中で、彼自身がシュナイダー『ファシズム国家論』, パーム・ダット『ファシズム論』, ピアトニッキー『ドイツ・ファシズム論』, 今中次麿『独裁政治学叢書』(全4巻), 今中次麿・貝島兼三郎『ファシズム論』に讃辞を送り、またマジャーの論文「日本におけるファシズム」(『産業労働時報』1932年10月号)に注目すべきものがある、と書いていることからみても推察することができる。とくにダットの著作が「第一、ファ

シズムの経済的基礎の取扱いの深化，第二，ファシズムの大衆的基礎とその階級的デマゴギーとの関係を明晰にすること，第三，ファッション化過程の多様性のより立ち入った分析，第四，ファシズムと植民地諸国の問題，第五，社会民主主義とファシズムとの関係に関する新しい諸問題，第六，中間層の問題の重大性をより以上認識すること」を挙げ，ファシズムについてのより厳密な規定を行うとともに，各国でのファッション化の独自のあり方を指摘していることは、「日本ファシズムの理解にとって極めて重大な点だ」とも書いている<sup>7)</sup>。彼の、さきに引用した「日本主義の再検討」（1935年）や「大衆の再考察」（1936年）は、明らかにダットに学び、それをいっそう理論的に深化させた労作であるといつてよかろう。そしてその深化は、彼が日本の現実を洞察し、日本のファッション化という具体的過程を基礎におきながら理論構成を行おうとしたところから生まれていることはたしかである。

にもかかわらず、戸坂は、コミンテルンのあの28年の『綱領』や『任務』が規定していた「社会民主主義＝社会ファシズム」論からついに脱脚することはできていなかった。そこに、戸坂が『綱領』や『任務』、あるいはダットよりはるかに卓越したファシズムおよびその社会的基礎論を展開したにもかかわらず、根本的な欠陥をひきずっていた点でもある。それは、おそらくは、彼が「三二テーゼ」の規定に大きくひきずられていたからだと思われる。そこで、次節でそのことを追究してみよう。

（完結しないまま掲載せざるをえなかったことを、心からおわびしたい。それは枚数がいちぢるしくオーバーしたためであり、続稿は本誌第六号に掲載される予定である）

---

7) 同上書第2巻，424～430頁参照。

8) 同上書第5巻，384～5頁参照。